

〈文明の衝突〉を超える視点

八 卷 和 彦

0. 〈文明の衝突〉とは何か

1993年にハーバード大学の政治学者ハンチントン (Samuel P. Huntington 1927-2008) が「文明の衝突？」⁽¹⁾という論文を発表して以来、〈文明の衝突〉という世界のとらえ方が注目を集めた。その後、彼はこの論文を拡張した形で1996年に『文明の衝突』⁽²⁾という一冊の本を出版して、さらに話題的となった。ハンチントンのこの視点については、発表直後から様々な批判がなされていたが、それでも〈文明の衝突〉という言説は、とりわけジャーナリズムの世界で一人歩きをする形で注目され続けていた。そして、2001年9月11日に発生した「9・11」以来、ハンチントンは〈文明の衝突〉の予言者であったとみなされると共に、〈文明の衝突〉こそが21世紀を刻印する自明の事実のように言われることとなった。

あの日、イスラーム過激派が乗っ取った旅客機が、とりわけニューヨークの貿易センタービルに乗客もろとも相次いで衝突したことは、まさに「イスラーム文明」と「西欧文明」という二つの文明の「衝突」の象徴として、ほとんど

(1) *The Clash of Civilizations?* In: *Foreign Affairs*, July, 1993.

(2) *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (London/Sydney 1996)

世界中で受け取られた。その際に重要な役割を果たしたのは、この事件の発生場面が、偶然とはいえ最先端の技術によりライブ映像として世界中に中継されたことである。その結果、「西欧文明」側では社会の中に大きなショックが生じ、ジョージ・W・ブッシュ第43代米国大統領は「対イスラーム十字軍」を口走るに到った。そればかりではなかった。シニカルで冷静なはずのフランスのジャーナリズム界の、とりわけシニカルな『ル・モンド』紙上にも、「ハンチントンの主張は、マンハッタンの恐るべき惨事によって立証されたようだ。…われわれは大戦争の始まりを生きているのである」という署名入り論説が登場することになったと、クレポンは伝えている⁽³⁾。他方、「イスラーム文明」の側でも、これを〈文明の衝突〉としてとらえ、その勝利への第一歩だとみなして歓喜する民衆が居たことは、同じくマスメディアで伝えられた。以来、この地球上には、〈文明の衝突〉という言葉が跋扈しており、ともすればあらゆる紛争をそれに還元して事足りりとする傾向さえあるように見える。

しかし、現在、世界の諸地域で展開されている諸紛争——残念ながらわれわれは諸紛争が存在するという事実は認めざるをえない——のうちに、ハンチントンの主張するように〈文明の衝突〉の現われとして解釈すべきものがあるのだろうか。このような疑問を呈する権利がわれわれには、とりわけ東アジアに生きるわれわれには、存在するはずである。

以下の考察は、〈文明の衝突〉が現実存在していることを前提にしてなされるものではなく、人口に膾炙している〈文明の衝突〉という思想現象を前提にしつつ、そこから生み出されている「幻想」を考察の対象として、それを超える視点を確保しようとするものである。

(3) Dominique Dhombres, *Le Monde* (13. Sept. 2001, p. 19). クレポンの記述による: Crépon, Marc, *L'Imposture du Choc des Civilisations* (Pleins Feux 2002) p. 10. (白石嘉治 (編訳)『文明の衝突という欺瞞』[新評論 2004]) 15頁以下。

1. 〈文明の衝突〉と言われるものは実在するのか

(1) 「文明」とは衝突できるものか？

ハンチントンの〈文明の衝突〉に対してわれわれがまず疑問に感じることは、「文明」とは衝突できるものであるのか、ということである。そこで、まず「衝突」が成立するための条件を考えてみよう。

第一に、世界に複数の「文明」と言われるものが現存していなければならない。「文明」civilization という概念が初めて成立したのは、18世紀フランスにおいてのことである。当初は「未開」や「野蛮」に対する概念として、「文明」は単数形で表記されて、いわばそれは西ヨーロッパにしか存在しないものとされていたという事実は、今ではよく知られている。その後、19世紀初頭にいたり複数形でも用いられるようになった⁽⁴⁾。こうして、欧米人の思考のなかに複数の文明が存在するとされるようになって今日に到っている。この意味で、確かに複数の文明が存在していると言えよう。

第二に、〈文明の衝突〉という思想が、「文明」をある種の擬人化によって「衝突の主体」となりうるかのように扱っているという表現上の曖昧さをもっていることを前提的に指摘した上で、そうではあっても、その衝突の当事者となって「衝突」と言われるような事態が現象するためには、一つの文明が他のそれと明確に区別されていることが不可欠であることも指摘しなければならない。

ハンチントンが挙げている諸文明とは、中華文明、イスラーム文明、西欧文明、東方正教会文明、ヒンドゥー文明、ラテン・アメリカ文明、日本文明の七つであるが、それにアフリカ文明を付加することもある。

では、これらの文明は、互いに明確に区別されているものであるのだろうか。われわれがその当事者である「日本文明」を例にとって考えてみよう。これは、

(4) Braudel, Fernand; *Grammaire des Civilisations* (Paris 1987), pp. 33-39 (松本雅弘訳『文明の文法 I』(みすず書房刊) 31-37頁)。

どの点で隣接する中華文明と明確に区別されるだろうか。もし「日本文化」と「中国文化」という表現で比較するならば、当然のことながら互いに区別をつける形で双方を取り出すことは可能である。しかしその場合でも、両方の文化に共通なものがあることを排除しないし、それが自ずと「衝突」することも想定しがたい。

また、日本は一つの文明圏を形成しているとされているのに対して、朝鮮、台湾、ヴェトナム、それにシンガポールは中華文明の圏内とされている。おそらくハンチントンも、現状での経済力を判断の基礎に置きながら、歴史的にみて中国による明確な冊封体制下にあったか否かで、朝鮮ならびにヴェトナムと日本とを区別して、日本は独自の文明圏をなしているととらえたのであろう。しかし中国からの文化的な影響関係からみると、実際には日本と他の二国との間にそれほど大きな差異は見出せないであろう。そもそもわれわれ日本人が、自分の属している文明があるとして、それを、ハンチントンの言う意味での「文明」として、「日本文明」であると主張するだろうか。歴史的にさかのぼっても、冷静な考察に立ってそれを主張した日本人が居たとは、寡聞にして知らない⁽⁵⁾。

同様なことは、西欧文明と東方正教会文明との間にも見出されるはずである。そればかりかイスラーム文明についても、「一枚岩的なものとしてのイスラームは《ウンマ》〔イスラーム共同体〕というフィクションにおいてのみ存在するが、政治的現実としては存在していない。…単数形の《イスラーム》は、観念の産物である。…《イスラームの諸世界》〔という複数形〕について語ることのほうが適切である」⁽⁶⁾という、ドイツの国際政治学者ゼンクハースの指

(5) 福沢諭吉は『文明論之概略』において「日本文明」ということばを用いているが、それには、ハンチントンの意味での他の文明圏と区別される「日本文明」圏という意味はない。「文明とは、人間交際の次第に改まりて良き方に赴く有様を形容したる語にて、野蛮無法の独立に反し、一国の体裁を成すという義なり」（『文明論之概略』〔岩波文庫版〕57頁）。神山四郎も「日本は一番早く一番うまく西洋化をこなしたが、日本文明というほどのものはない」としている（『比較文明と歴史哲学』〔刀水書房〕201頁）。

摘がある。

さらに、逆の形の疑問も生じる。西欧文明のなかに、どうして大陸を異にし、歴史的にも大きな違いのある「新世界」すなわちアメリカ合衆国が含まれるのだろうか。事態を冷静にとらえるヨーロッパ大陸側の人間には奇異に映っているに違いない。

つまり、ハンチントンの文明設定は恣意的であいまいであることになる。それは、そもそも「文明」というものが、ハンチントンの利用したい概念枠組みに適合するほどには明確に区別されうるものではないことを示しているであろう。

以上の検討から、「文明」が衝突すると主張することには無理があることになる。

おおまかにとらえれば、たしかに単なる「文化」よりも大きな影響力をもつ「〇〇文明圏」と名づけるような一定の伝統的広がりが存在するとは言えよう。しかし、それはその中核にいっさい変化することのない独自性をもつものではない。つまり、文明本質主義は成立しないのである。隣接する文明圏との間に相互交流とそれにとまなう相互影響が存在してきている。比喩的に表現すれば、諸文明圏は空にかかる虹の色のように、グラデーショナルな相違をもって展開しているのであり、他の文明圏といわば互いに重なり合いながら存在しているのである。ハンチントンは、そのような状態のなかから自分の「理論」構成に都合のよい部分を取り出して強調することで、それぞれの文明の完結性と独立性を主張しているのである。

この恣意性は、実はハンチントンも自らは気づかない形で自認しているのである。なぜなら、彼にとって「文明」が問題になるのは、それが侵略する力を

(6) Senghaas, Dieter, *Zivilisierung wider Willen* (Frankfurt am Main 1998) S. 170 (宮田光雄他訳『諸文明の内なる衝突』〔岩波書店〕163頁)。彼はここでシリア、ヨルダン、エジプト、リビア、マダガスカル諸国、イランのそれぞれの国家体制の異質性とその多様性を引き合いに出している。

もっているという点、(より平和的に表現すれば)それが作用する力をもっているという点であるが、文明について彼が想定しているこのような事態は、他方において彼が「文明」について想定している、「衝突」の主体となるほどに自己完結性を有する「文明」というものとは矛盾することになるからである。

そもそも地球上の文化の相違を、先ずは自己中心主義的に「文明」と「野蛮」とに二項分割すること(どの社会でも生じがちなことではあるのだが)が誤りなのであり、それはその後も続く誤解の原因にもなっているであろう。改めて「文明」という語の原語であるフランス語の‘civilisation’という語を考察してみれば、これは‘civiliser」[…を文明化する]という動詞から成立した名詞であり⁽⁷⁾、状態を意味しているというよりも、「文明化する」(野蛮から脱け出させる)という作用とその結果という意味をもっている。さらにこの語の成立の経緯を想像してみよう。すなわち、18世紀フランスで、つまりアジアやアフリカを盛んに植民地化していた時代の植民地宗主国においてこの語が成立したのであり、大いに乱暴な事態が含意・表象されていることになる。つまり「文明」(E. civilization)という概念は、そもそもが「他者を(自己の文明の影響下に入れるという意味で)文明化する」という意味を含んでいることになる。この点にこそ、ハンチントンの〈文明の衝突〉という思考が生れてくる一因があるのだろうし、この思想がまずは西欧において支持された遠因でもあるのだろう。たしかに「西欧文明」にはこういう傾向がある(あった)かもしれないが、すべての文明がそうであるとは限らないのである。

(2) 〈文明の衝突〉とは、「文明」の「衝突」ではない

われわれ日本人は civilization を「文明」と翻訳して受け取っている。また、civilization とは語源的含意をかなり異にする culture も、「文化」と翻訳して

(7) Braudel, Ibid. p. 33 (『文明の文法 I』 31頁)。

受け取った。この日本の状況（あるいは東アジア的状況）を「文」という語の意味に注目しながらとらえ直せば、次のように言えるだろう。本来「文」は「武」と対立する概念であり、後者は暴力的な衝突につながる意味をもつが、前者「文」はそれと正反対の意味をもつものである。それゆえに、東アジアでは「文明」は「文明」であるかぎりにおいて「衝突」するようなものであるとは、みなされてきていないのである。それは、福沢諭吉の『文明論之概略』も、また大隈重信の『東西文明の調和』も示しているところである⁽⁸⁾。

しかしながら現今の世界には、これこそ〈文明の衝突〉の具体例だと言われるような紛争が存在していることも確かである。しかし、それらは本当に〈文明の衝突〉なのであるだろうか。まずは、〈文明の衝突〉とよく似ている「宗教戦争」と言われるものに一瞥を向けてみよう。1960年代末以降にイギリス全土を巻き込む形で展開された「北アイルランド紛争」というものがある。この紛争の表面上に見える形は、カトリック教徒とプロテスタントが争っているというものであり、「宗教戦争」の一つだと言われやすかった。しかし実際には、次のような歴史的な政治状況が原因であったのだ。17世紀の初めにこの地域を植民地化したスコットランドとイングランドは、そこに植民者を送り込んで植民地化を進めながら、この地域の原住民であるアイルランド人を二級国民として扱った。ところが、この植民者たちはスコットランドとイングランドの出身であったので、当然のことながらプロテスタント・キリスト教徒であり、他方、イギリス領とされた北アイルランドの元々の住民は、アイルランド島の住民全体がそうであるように⁽⁹⁾、カトリック・キリスト教徒の信徒である。このような住

(8) 福沢も「文明とは英語にてシウキリセイションという」（前掲書57頁）として、‘civilization’という語については意識しているが、それを他者に向かって働きかけるという傾向を有する概念であるとは考えず、注5で示したように「自らを文明開化する」という方向で理解しているので、文明間の争いを考察の対象には入れていない。また大隈も、その著書『東西文明の調和』において、その書名から想定されるかもしれないような文明間の争いを主題としているのではなく、むしろかたに互いの長所を生かし合い、短所を補い合うかという視点で論じている。しかし、この点についての論展開は不十分のままに、大隈の死によってこの論考は終わっている。

民構造の中で、原住民たるアイルランド人は様々な差別を受けることになり、その状態は20世紀まで続いてきた。これに対しては原住民側から、時には暴力を行使しさえする抵抗運動が行われるようになり、これに対抗して、同じく暴力行使をも伴う植民者側の応酬が行われたものが、「北アイルランド紛争」である。これは、カトリックとプロテスタントという異なった宗派が宗派の異なっていることを理由にして衝突した「宗教戦争」ではなく、教育や職業、社会的諸権利において差別された弱者が支配側に対して行った抵抗運動であり、その場合の弱者と強者とが宗派において異なっていたというわけである。しかし実際の紛争の激化の過程では、互いに自分のグループ内の結束を固めるために、「絶対的相違」であり「アイデンティティ」の根拠でもある「宗派の異なり」という側面を内外に向けて強調することが、双方において行われたことも事実である。

〈文明の衝突〉についても、これと同様の構造が見てとれる。たとえばハンチントンによってその典型とされている第一次イラク戦争（湾岸戦争）⁽¹⁰⁾、現地の政治情勢をみればクウェートとイラクの領土争いであり、国際政治的にみればクウェートとイラクとの国境地帯にある石油資源の争奪戦であった。しかし戦争の遂行過程でイラクのフセイン大統領は、この戦争をイスラーム世界に対するイスラエルおよびその支持者であるキリスト教諸国による攻撃であるという構図を描いてみせながら、アラブ世界に団結と支援を呼びかけた。だがこれは、本来フセイン大統領の思想的立場とは異なる政治行動であった。即ち彼はバース党（アラブ社会主義復興党）による一党支配体制のもとでの大統領であったのだが、バース党は元来イスラームという宗教が政治に関与するのを否定しつつ政治を運営することを旨とする世俗主義的傾向が強い政党だからで

(9) 元来、アイルランド島の住民は、古代ローマ帝国の末期にキリスト教化されて以来のキリスト教信仰を保持してきたので、カトリック・キリスト教の信徒である。

(10) *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, p. 251f. (『文明の衝突』382頁)。

ある。つまり、フセイン大統領のこの呼びかけは、戦況を自分の側に有利に展開しようとする便宜的な政策であったと言えよう。

同様な政治操作は、戦争を仕掛けた米国側にもあった。G. H. W. ブッシュ第41代大統領は、自国だけが戦争遂行の主体になることを避けるために、34カ国からなる「連合軍」Allied forcesを組織した。このAllied forcesは、日本では「多国籍軍」と、おそらく意図的に誤訳されてマスメディア上で使用されたが⁽¹¹⁾、この英語が国際舞台で一般的に想起させるものは第二次世界大戦における「連合軍」のことである。つまり、この語は一般にファシズムに対抗して自由と民主主義を守る正義の戦争というイメージを強く喚起する力をもっている。それを利用してブッシュ大統領は、自由と民主主義は西欧側にしか現存しないのだが、この「連合軍」に参加する国々は、それぞれの国でその実現を約束しているのだと、さらに、45年前の連合軍と同じように輝かしい勝利を収めることが約束されているのだと、主たる戦争参加国である米国と英国の国民にアピールしようとしたのである。こうして、ブッシュ大統領は自分の始めた戦争への国内外の批判をかわすと共に、さらに自分の側の団結を固めようとしたのである。

ここに見てとれる構造は、〈文明の衝突〉としての戦争が存在したのではなく、まずは物質的な利害対立に起因する戦争があり、それを双方が有利に展開するために「文明」という材料を戦争に動員したということである。上掲のゼンクハースは以下のように述べている。「文化的紛争が起きるのは、他の権力資源が不足するため、言語、宗教、歴史が意図的に動員され、対立の道具として用いられるときである。このようなケースで、文化の源泉へ回帰することは、それ自体のためではなく、権力のために生じているのであり、原典の解釈は、

(11) この理由は、日本をこのAllied forces側に参加させるために、「連合軍」という、日本人に違和感を抱かせる可能性の強い語を避けたのだらうと推測される。それでも、周知のように、日本国内では参加をめぐる大論争が巻き起こった。

テキストの正確な解釈を目的とするのではなく、権力のためになされるのである」⁽¹²⁾。

つまり、たとえ異なる文明間に生じる紛争があるとしても、その原因は、ハンチントンが主張するように、文明の相違にあるわけではない。紛争を自分の側に有利に展開するために、自分の陣営に対して、この紛争はわれわれのアイデンティティの存亡に関わる闘いなのだ（下の注40の個所に示したハンチントン自身の発言を参照されたい）と強調することで、内部を固めたり外部の支援を得やすくするための手段として、そのアイデンティティの基盤としてみなされやすい〈文明〉を動員しているということなのである。

2. なぜ〈文明の衝突〉が一定の支持をうるのか？

上述のように、事実としての〈文明の衝突〉が現実存在しているわけではないにもかかわらず、ではなぜ〈文明の衝突〉という言説が今日の世界で一定の支持をえているのだろうか？それは、地球上のどの地域でも、民衆レベルに、自分たちが何か〈異なるもの〉によって犯されているのではないか、自分たちの生活している領域が侵されているのではないか、という不安感が卓越しているからだと言えよう。そして、その原因としては以下のようなものが挙げられるであろう。

(1) 科学・技術の「進歩」と現実の生との齟齬

人間はたしかに数学のような精緻な世界を構築することが可能な存在であるが、自分自身の生き方をそのように精緻なものとして実践することは不可能である。また、数学の応用版ともみなしうる「科学・技術」一般は、たしかに数学ほどに精緻に構築されたものではなく、それゆえに一般の人間にとっても利

(12) Senghaas, Ibid., S. 168 (『諸文明の内なる衝突』160頁)。

用可能な側面をもつのではあるが、それでも、人間が科学・技術の「進歩」に即応して生き方を変えることは、常に誰にでも可能であるというわけではない。

このような齟齬は、科学・技術が卓越的に機能する社会に生きる人々に不安感を醸成させる。生活が便利になることは歓迎できるが、その便利さを自分の制御の下におくことができないもどかしさが不安に転じている、と言うこともできよう。その主たる原因は、科学・技術が発展すればするほど、一般人にとっては、それが機能するメカニズムやシステムがブラックボックス化して理解不能になるからである。

さらに、科学・技術の発展は労働現場での機械化を促進し、労働に携わる人々は機械に使われているという感覚に襲われやすい。そればかりか、機械の機能についていけないことは、自らの労働者としての地位を失うことを意味するという理解が成立する。既にほとんど死語となるほどに普遍化した「オートメーション化」は、実際に大量の労働者を不要な存在とした。つまり、その領域での失業者を増やしたのである。

以上のような状況は、19世紀初頭にイギリスに発生したラダイト運動に類似した心理状態を、現在、世界中で生み出しているとみなすことができよう。

(2) 〈競争〉の激化

「科学・技術」が世界中を覆うようになったことで、物的資源のみならず、本来はそれを利用して生きるはずの人間が、それも世界中の人間が同じ一つの規準でくられた上で、「人的資源」とみなされるようになった。この結果、現在では様々な分野における人間同士の競争が、歴史上かつてなかったほどに熾烈に展開されている。

具体的に説明するならば、以下のような競争の側面が存在している。まずは、人が人と競争するという場面である。

- 1) 競争する相手の数が無限大になりつつある。この見やすい例はスポーツ界である。「科学・技術」の進歩によって、今やスポーツ選手の能力の比較が地球規模で可能になり、より有力な選手はあっという間に有利な条件で契約できるが、少しでも劣った選手は契約から排除されるという状況が生じている。同様な競争があらゆる分野で生じつつある。その結果、ある時点で競争の頂点に立った人でさえも、次の契約時には地位を失う可能性を想像できるので、安心してはいられないのである。
- 2) 次に、「人的資源」間に見出されるわずかな差異さえも「科学・技術」を利用して数値化されることで、「違い」が歴然と示され、その結果、「劣った」数値の帰せられる人物が労働市場から排除されることが合理化されやすいという傾向が生じている。つまり、「合理的に敗者と判定される」という場面が生じやすくなっており、「敗者」と判定された人々には社会の中で逃げ場がないという事態が生じているのである。
- 3) さらに、上の(1)で述べた状況から生じる、人が機械と競争させられるという側面がある。先ずそれは、同じ労働について人間が機械との間で、能率性をめぐって競争させられるということである。そればかりではなく、機械を使用している労働者が、機械の反応の速さに応じて自らの作業を速くしなければならないという意味での競争もある。これは、上述の「機械に使われている」という状態の一種ともみなせるのであるが、当人はそのように意識することなく、より効率的に成果を出そうという前向き姿勢をもって働いているのに、気づいてみると大きなストレスを得ているという状況である。
- 4) すぐ上で述べたこととも密接に関わるが、現代では人が時間（機会）と厳しい競争をさせられることが多い。その典型例は、労働現場で作業の合理化を進める際にストップウォッチによって労働者の作業を測定する光景に見出すことができる。これは、生命体としての時間（意識）と

は別の物理的時間によって人間の日々の生活が制御されていることになる。これも人間に大きな不安を生み出す要因である。

(3) 加速度的に増強される情報の洪水

通信技術の発達によって、われわれは好むと好まざるとにかかわらず、世界中の多様な情報にさらされている。しかし、人間にとって意味をもつ情報量、あるいは処理可能な情報量は限られているはずである。それを超えると、情報としての意味はなくなり、たんなる雑音（ノイズ）となる。だが、ノイズによってもわれわれの感知能力は消耗させられるから、その結果、感知能力がほとんど麻痺して、逆に自分にとって必要な情報にさえも適切な応答ができなくなるという状況が生じてくる。

最近ではIT技術の進歩により、音声情報や画像情報もふんだんにわれわれに提供されるようになってきている。しかし、文字情報に比べると、音声情報、さらに音声を伴った画像情報は、それをコンピュータに記憶するに際して必要とする記憶容量の増大⁽¹³⁾に比例するような形で、より強くわれわれに作用するのであり、それに比例する形でわれわれは自分の感知能力を消耗させられているのである。

さらに現代では、これらの大量な情報がコンピュータの同一の画面上に現われることによる問題も生じているということを指摘する必要がある。つまり、自分の前にある画面上に、多様な情報が次々と出現する。その情報は、一冊の書物のように一見して判明な順序をもって並んでいるわけでもなく、ましてや、新聞紙上のように一般的な重要性の順序に従って配列されているわけでもない。信憑性の不明な多くの情報源（発信源）に由来する多様な情報が、同じ

(13) Bolz, Norbert: *Am Ende der Gutenberg Galaxis* (München 21995), S. 129sq. (式名・足立訳『グーテンベルク銀河系の終焉』〔法政大学出版局刊〕237頁)の記述から推算すると、一分間のカラーのビデオ映像が必要とする記憶容量は、長編小説333冊分のそれに匹敵する。

サイズの画面に現われるだけである。

つまり、われわれが接する多様で大量な情報が自分にとってどれだけの価値があるのかということは、自分自身が判断しなければならないのである。これは大きな自由を手に入れていることではあるが、しかし、この事態はわれわれにとって常によいことであるわけではない。われわれは自分の判断力に自信をもてないことが少なからずあるからである。かつては、そういう場合のために「評論家」という存在が居た。彼らは、紙面上に登場し、その情報の価値を判断して読者に知らせてくれる特権的な読者であった。しかし、インターネットが卓越する現在の情報世界では、誰でもが発信者になりうるので、個々の情報の判定者の役割を果たしてくれる存在を適確に見つけることはむづかしい。その情報の信憑性を自身で判断しなければならなくなっているのである。これも大きな不安要因となる。われわれは、「ネットサーフィン」をすることによって、遊んでいるどころか、適切なナビゲーションの存在しないままに情報の「大海原」を漂流することになりかねない状況にあるのだ。

さらにわれわれには、情報の洪水にさらされているうちに、本当は真相を知っているわけではないことを、あたかも知っているかのように錯覚する傾向が生じる。〈量〉の多さが〈質〉を決定するという、古典的なプロバガンダ技術によって生じさせられる深刻な誤解や錯覚である。

(4) 「生きる世界」の拡大

現代では、輸送技術と通信技術の驚異的な発達によって、誰でもが「自分の生きる世界」の拡大を実感せざるをえなくなっている⁽¹⁴⁾。

具体的に言えば、上述の労働市場の拡大に伴う自己の地位の不安定化の原因になっている事態であり、また、日々使用する食料や物資が遙か遠くの国から

(14) かつては「世界の膨大な広がり」とは、「核の恐怖」というような、想像力を働かせることにおいてのみ実感できるものであった——これは、もちろん今もお存在しているが。

運ばれてきたものであるという事態である。つまり自分の生を支える世界がやみくもに拡大しているという実感である。

同じ理由によって、逆に自分が生まれ育った場所でさえも、将来にわたって自分の慣れ親しんだものとして存在し続けるという展望をもちにくくなっている、という事態も生じている。

この両方の事態の結果としてわれわれは、あたかも一人の幼い子どもがいきなり広い舞台に連れ出されたような感覚をもつようになっている。つまり、自分の立ち位置が分からない不安と恐れである。

そもそも人間は誰でも、自分なりの原点を確保し、それを基にして世界についての自分なりの座標を描くことで、安心して生活しているものである。しかし現代ではその座標が描きにくくなっている。広大な世界のなかで自分の居場所を確保できないだけでなく、自分の故郷 (Heimat) に居てさえも故郷に居るような気がしない、つまり居心地の悪さ、不気味さ (unheimlich) を感じさせられることが多くなっているのである。つまり、われわれはいわば故郷を失った者として、根こぎされた者 (dérasiné) として生きることを余儀なくされつつあると言うことができよう⁽¹⁵⁾。

この心理状態は、アイデンティティの喪失感という、より深刻な問題を惹起する可能性が強い⁽¹⁶⁾。そして、この喪失感を埋めるために、「宗教復興」とか「スピリチュアリティ・ブーム」と称されるような現象が人々の間で生じているとみなせるだろう。

(15) だからこそわれわれは、より心地よい場面を求めて、好んで旅行をするのだろう。ここに現代の先進国における旅行産業の隆盛の原因の一つを見出せるかもしれない。

(16) この点について論者は、かつて以下の論文で少し異なる視点から考察したことがある：Die Identitätskrise Japans - eine Ursache der aktuellen Wirtschaftskrise: in, Distinguished Lecturer Series/Mitteilungen des Japan-Zentrums an der Wissenschaftlichen Hochschule für Unternehmensführung Otto-Beisheim-Hochschule, Paper No. 5 (1998), 1-13. さらに下の注41のハンチントンの言明も参照されたい。

(5) 恐れと敵意と自己防衛意識

これまで述べてきたようなわれわれの生きている世界の状況によって、われわれはこれまでの人類が経験したことがないほどに頻繁に多種多様な〈なじみのないもの〉、〈異なるもの〉(E.: strange; F.: étrange; D.: fremd)と遭遇せざるをえない。それは、人や物だけではなく、技術や情報、状況でもある。しかし人間は〈なじみのないもの〉に対しては、生命体としての自己保存本能から自ずと警戒感と恐れを抱き、場合によっては敵意さえも抱くことになる。それは、子どもに顕著であるが、大人であっても精神的に余裕のない状態にある場合には、あるいは自身を取り巻く状況を客観的にながめることができない人は、容易にそのような状態に陥る。これは人々に強い不安感を醸成し、ひいては社会全体を不安定にしかねない危険性をはらんでいる。

なぜならば、その不安感はそれを解消(解決)するためのはげ口を身近に存在する〈なじみのないもの・異なるもの〉に求めると共に、そうすることで逆に自己の存在を絶対的に肯定しようとするショーヴィニズムを容易に育むからである。

この具体例を20世紀前半のヨーロッパに見出すことができる。当時、急速な資本主義社会化とそれを基礎で支える役割を果たした近代の科学・技術の荒波にもまれたヨーロッパの人々は、自分たちの不安感と苦境の原因を身近に存在する〈異なるもの〉としてのユダヤ人になすりつけて、彼らを社会から排除するばかりか抹殺しようとさえしたのである。これは、E.フロムが有名な著作『自由からの逃走』において活写している通りである⁽¹⁷⁾。

そして現代欧米では、その市民が抱く不安感と直面する苦境の原因がどこに求められようとしているのだろうか。自己の社会内に暮らしているイスラーム教徒(ムスリーム)に対して、そのような悪意と疑いの眼差しが向けられている

(17) Fromm, Erich: *Escape from Freedom* (New York 1941) (日高六郎訳『自由からの逃走』[東京創元新社刊]。とくにそのChap. VI: Psychology of Nazis.)

るのではないだろうか⁽¹⁸⁾——自分たちの社会の必要性によって招き入れたムスリムなのであるにもかかわらず。また、東アジアの日本と韓国と中国では、相互に相手をそのように見立てようとしているのではないだろうか——広く視野を取れば、お互いに文化的には極めて近いことが容易に見出せるにも関わらず。

いずれにしても、プリミティヴな防御反応に過ぎないのであるが、あなどることのできない危険性をはらむ心理状況である。

3. 〈人間の生〉の三層構造

〈人間の生〉を「人間の総合的生活活動」としてとられるならば、そこに以下のような三層構造を見出すことができると思われる。すなわち、下から「生存の基礎活動」、「具体的生活」、「抽象的活動」の三層である。そのうち、最下層の「生存の基礎活動」とは摂食活動、睡眠活動、生殖活動等であり、「具体的生活」とは最下層の上に展開されている、いわゆる社会的な活動であり、最上層の「抽象的活動」とは中間層の「具体的生活」を基礎としつつ、同時にそれを機能させている理論化の営みおよび生きる世界の定位である。具体的には、算術とか読み書き等のシステム、さらには東西南北とか上下のような住まう空間の方位付け等である。

最下層の「生存の基礎活動」においては地球上の人類は明らかに共通性を有しているものであり、その最たる証拠は、民族や文化伝統を異にする男女であつ

(18) ハンチントン自身がこう書いている。「西欧文化は西欧社会内部の集団からも挑戦を受けている。一つは別の文明から訪れた移民たちから突きつけられるもので、彼らは同化を拒み、出身地の社会の価値観、生活習慣や文化にいつまでも固執し、それを広めようとする。この現象が最もいちじるしいのはヨーロッパに暮らすムスリムであるが、彼らはまだ数の上では少ない少数民族（マイノリティ）である。ムスリムほど目立たないが、アメリカに住むヒスパニック系の住民にも同じ態度が見られ、しかも彼らは規模の大きい少数民族である。こちらの場合、同化がうまくいかないと、アメリカは内部闘争とそれに必然的にもなう分裂のあらゆる可能性を抱え込んで分裂国家となってしまうだろう」（*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, pp. 304（『文明の衝突』467頁。ただし訳文は引用者が原典に沿って直した）。

でも生殖活動を営めば子孫を残すことが可能であることである⁽¹⁹⁾。また、最上層の「抽象的活動」においても人類は明らかに共通性を有している。2プラス3はいかなる民族においても5であるし、用いる言語は異なっても言語としての共通性を有するので、互いに文法を学べば意思疎通が成立するのである。

以上で明らかのように、三層のうちの最下層と最上層において人類は明らかに共通性を有しているのに対して、中間層では極めて多様であり、互いに相違している点も顕著である。例えば、服装や食糧の生産の仕方、生活規範等が多様である。この多様性の主たる原因は、いうまでもなく地球上の自然条件が多様であるからであり、さらにそれぞれの地域の人間がその地域の自然条件に規定された社会条件に従って生活しなければならなかったからである。それゆえに、この層における多様性は、従来の技術ではもとより、現行の科学技術をもってしても完全には解消不可能であるばかりか、解消すべきではないものもある。

三層構造からなる「人間の総合的生活活動」がこのように、その最上層と最下層において人類に共通の内容をもちながら、中間層において相違しているという事実は、〈文明の衝突〉を超える視点を確保する上で重要な示唆を与えるであろう。なぜならば地球上の人間は、人間としては共通であっても、地域ごとの相違に起因するところの多いそれぞれの伝統に従って生きねばならないからである。これについては、自身がユダヤ人としてナチスの時代の迫害によってアメリカに亡命を余儀なくされたアーレントの以下のような主張に耳を傾けたい。「男性と女性が、相互に絶対的に相違するものであることによるのみ人間としては同一でありうるように、すべての国の国民は現にあるがままのものであり続け、かつあくまでもそれを維持することによるのみ、この人類の

(19) 今、ここでは最下層の共通性の証左として、あえて争いの場におけるそれを、ヘシオドス『仕事と日々』(Hesiodos: „Erga kai Hemera“)から挙げてみる：第235行「(平和の日々が続けば)妻たちは父親に似た子をば産む」(Hesiod, *Works and Days* (London 2006) p. 106).

世界史に参加することが可能となる。一つの世界帝国という専制のもとに生活し、ある種の美化されたエスペラント語で話したり考えたりする世界市民とは、両性人間に劣らぬ怪物であろう。…人類の統一とその団結は、一つの宗教、一つの哲学、あるいは一つの統治形態に万人が同意することにあるわけではなく、眼前にある多様なものが、多様性の覆い隠すと同時にあらわに示してもいるある一致を指し示しているのだ、という信念のなかに存在しうるのである」⁽²⁰⁾。

4. 交流の必要性

人間は、たとえ見知らぬ他者であっても、お互いが人間であることを認識すれば、敵意は、ただちに解消しないまでも減少する。そのためには、上述した〈異なるもの〉への警戒感と敵意を醸成しないような条件を整えた上で交流する必要がある。つまり、単なる偶然的な遭遇ではなくて、よく準備された交流が必要となるのである。以下でこの点を考察してみたい。

(1) 情報の交流

断片的な情報しか伝わらない状況下では、〈異なるもの〉への恐れから人間は妄想を膨らませがちである。それは見知らぬ社会に生きる人間に対しても同様である。いな、そういう人間に対してこそ、より大きな妄想を抱くとも言えよう。その具体例をヨーロッパ中世において広まっていた「東方の驚異」伝説に見ることができる。インドには一糸まとわずに動物のように自分の毛だけで覆われていて魚と水だけを食料としているというイクティファグス（魚喰い人）や巨大なキュノケファルス（犬頭人）が居ると描かれたり⁽²¹⁾、「荒野のイ

(20) Arendt, Hannah, *Men in Dark Times* (San Diego/ New York/ London 1968), pp. 89 (阿部斉訳『暗い時代の人々』〔河出書房新社〕112頁)。なお引用訳文は引用者が直したもの。

(21) 逸名作家「アレクサンドロス大王からアリストテレス宛の手紙」（池上俊一訳）『西洋中世奇譚集成 東方の驚異』〔講談社学術文庫〕37頁。

ンドの一部には、有角人、一つ眼人、また前後に眼をもつ人種がいます。彼らはサニットゥリ、セノファリ、ティグロロベスと呼ばれています」²²⁾と叙述された。

そして、このような妄想は現代に生きるわれわれにもけっして無縁ではない。今から65年前まで、日本人は「鬼畜米英」と教えられていた。アメリカ人とイギリス人は、人間の皮をかぶった鬼畜であるという意味である。それは、日本政府が戦争遂行のために国民を効果的に動員する宣伝手段として用いた表現であったが、当時の多くの日本人は、遙か離れた異国に住むアメリカ人とイギリス人が自分たちと同じように感じたり考えたりする人間であると想像できるだけの情報を自らの手では獲得することが不可能であったので、このような宣伝でも信じたのである。単に信じただけではない。敗戦の際には、自分たち日本人はこの鬼畜によって耐えがたいほどのひどい目にあわされると思い込み、そのような目にあうよりは死を選んだ方がましだと考えて、自ら命を絶った人たちも、とくに直接の戦場となった地域には少なくなかったのである。まことに悲劇的な事態である。

しかしこのような思い込みと行動は、情報伝達の手段が当時と比較すれば格段に発達した21世紀にはもはや存在しないとは断定しがたい。たとえ情報量が豊富であったとしても、その内容に偏りがあるならば、情報の受け手である民衆はその量の豊かさに比例して強い偏見を抱くことになる。相手に対してマイナス評価を下す〈思い込み〉としての偏見がいったん成立してしまうと、民衆自身は自らそれが偏見であるかどうかを判断するだけの手立てをもたないか

²²⁾ 逸名作家「司祭ヨハネスの手紙(2)」(池上俊一訳)『西洋中世奇譚集成 東方の驚異』118頁。なお、この『東方の驚異』を叙述する中世末期の写本には、このような記述をもとにして当時の西洋で表象された「サニットゥリ、セノファリ、ティグロロベス」らが想像図として描かれている。その一端は以下のファクシミリで見ることができる：M-H Tesnière (Übersetz.), *Marco Polo, Das Buch der Wunder – aus: “Le Livre des Merveilles du Monde”, Ms. Fr. 2810 der Bibliothèque Nationale de France, Paris* (Wiesbaden).

ら、それを解くのは容易ではない。それゆえにこそ、民衆の間に誤った〈思い込み〉が成立しないように、十分な情報の交流が必要なのである。

(2) 人と人との出会い

正しい情報を得るだけでは人間の交流は深化しない。実際に人間同士が出会うことで、相手が自分たちの知っていた情報の通りであることを確認する必要がある。さらに「百聞は一見に如かず」の諺のとおり、情報によって理解していた以上の認識と相互理解が成立するのである。それは単に実物を見たとか実物に会ったという物理的な意味だけのことではない。人間とはその文字が表しているように、「世の中自身であると共に世の中における人である」という和辻哲郎の指摘のとおりの本質を有して生きているものだからである⁽²³⁾。この点を福沢諭吉も前掲箇所直前で次のように述べている。「元来人類は相交わるを以てその性となす。独歩孤立するときはその才智発生する由なし。家族相集るもいまだ人間の交際を尽すに足らず。世間相交り人民相触れ、その交際いよいよ広くその法いよいよ整うに従て、人情いよいよ和し智識いよいよ開くべし」⁽²⁴⁾と述べて、上掲の「文明とは英語にて…」と論じて進めているのである。

(3) 寝食を共にする付き合い

国の要人同士の相互訪問は、鮮明な映像と音声を通じて会議をすることも可能なほどに情報伝達の技術が発達した今日においても、減少するどころか、かえって頻繁に行われている。「〇〇サミット」というような、各国の要人が一堂に会して、さらには同じ衣服さえもまとって数日間にわたり寝食を共にしながら会議をするという形式は、むしろここ数十年の慣習である。

これは何を意味しているだろうか。ここにわれわれは、上で述べた三層構造

⁽²³⁾ 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』〔岩波全書〕30頁。

⁽²⁴⁾ 福沢、前掲書57頁。

を有する「人間の総合的生活活動」の作用を見出すことができる。すなわち、「寝食を共にする」ということは、三層構造のうちもっとも共通性が顕著である、摂食活動と睡眠活動とを共にすることであり、その結果、各国の要人の間に共通理解が成立しやすくなるのであろう。現代ではもっぱら「情報伝達」という意味で使用されている「コミュニケーション」Communication という語の原語にあたるラテン語の動詞 *communicare* は、「共に分ける、参加する」という意味を持っている。まさに「寝食を共にする」という事態が意味されているのである。つまり相互理解という意味でのもっとも深い「コミュニケーション」の成立⁽²⁵⁾は、「寝食を共にする」ことで成立するのである⁽²⁶⁾。

このような交流の仕方は、一国の要人同士にだけ必要であることでもなく、また彼らの間でだけ効果を発揮するものでもない。異なった国や地域の若者同士の交流においても、あるいはあらゆる階層の人々の交流においても効果を発揮する。実際に国際交流を推進しようと努めている現場では、このような合宿形式の若者の交流も盛んに行われている。それぞれの国で将来その国の担い手になる若者同士に、深い相互理解を成立させておくことは、偏見の成立を防止するという意味だけでなく、共通の事業を構想しその実現のために協力し合うという積極的な営みの成立にも、大いに効果を発揮するのである⁽²⁷⁾。

(25) ヤスパース (Karl Jaspers) は、この Communication のドイツ語形である Kommunikation (交わり) を用いて自身の哲学における重要な概念を表現して、以下のように述べている。「それゆえ哲学は、たえず交わりを求めること、逡巡することなく交わりを敢行すること、たえず異なった装いを凝らして自分を押しつけようとする強情な私の自己主張を放棄すること、このような放棄によって幾度と知れず繰り返し、私が私に授けられるという希望をもって生きること、を要求するのであります」(Jaspers: *Einführung in die Philosophie* (Darmstadt 1959), S. 125 (草薙正夫訳『哲学入門』〔新潮文庫〕159頁)。

(26) 国際的な外交交渉の場において「寝食を共にする」ことは、参加国すべてに好都合な結果ばかりをもたらすものではないことは言うまでもない。親密な人間関係の成立によって、自国に不利な内容をも拒絶しがたい雰囲気醸成されることもあるからである。つまり「寝食を共にする」会議での主導権争いも重要な要素となる。しかし、いずれにしても相手を理解し、相手の主張の真意を理解し合うことは、必須の前提である。

(27) 欧米の大学における学寮生活という中世以来の伝統も、この面での効果を一つの目的としているはずだ。

(4) 交流によって生じる豊かさ

異なった国の人間同士が交流することの目的は、意見の一致を見出すことだけではない。意見の相違や生き方の異なりを認め合った上で、そこに諸々の相違が総体としてもたらず調和 Harmonia を見出すことも重要である。上の引用においてアーレントが述べているとおりである。

交流の意義はそればかりではない。交流は、自分たちだけでは気づくことも楽しくこともできなかった文化の新たな世界を展開させることもあり、自分たちの伝統文化についてさえも今までにない豊かな実りをもたらすことがあるのだ。その典型的な例を音楽に見出すことができる。西洋発祥のクラシック音楽の世界では、日本人をはじめとする東アジアの人たちが数多く活躍している。また、西洋音楽の楽器をアフリカから奴隷として連行されてきたアメリカの黒人たちが使いこなし、高い技量をもってジャズというジャンルを打ち立てた。そればかりかこのジャズは、アメリカにとどまることなくヨーロッパや日本においても愛され、ヨーロッパ流のジャズも日本流のジャズも出現しているのである²⁸⁾。

このような例でもっとも歴史的に重要で広範な展開をしたのは、「喫茶」という文化であろう。周知のようにこれは中国発祥のものであるが、今では日本を含む東アジア地域のみならず、ユーラシア大陸の上を西方に伝播した上で大西洋をまたいで北米大陸にまで伝わったほどに、様々な民族に取り入れられている。そして、この喫茶の習慣が、ボストン茶会事件を介して、ハンチントンの愛するアメリカ合衆国の独立を成立させたこととらえてみれば、その意味の大

²⁸⁾ 残念ながら、日本発祥の文化が外国人の手によって新たな世界へと展開されたものとして日本に帰還する例は、未だ少ない。その理由は、われわれ日本人が、日本文化は日本人にしか分からないという「日本特殊論」に陥り易いからではないだろうか。以下は実際に論者が見聞した例である。日本文学は数十年来、諸外国でも読まれており、外国人で日本文学を研究する人は少なくない。しかし日本人の日本文学の専門家は、日本国内の大学に勤務しながら日本文学を研究している外国の研究者たちのことを、「われわれは彼らを日本文学の専門家とは認めていない。アマチュアだと思っている」と言うのである。日本文学の可能性を限定してしまう言動ではないだろうか。

きさも分かるであろう。

「喫茶」という文化がこれだけ広範に伝わった理由は、茶そのものを摂取した際の人体に対して及ぼされる生理上の好影響もあろうが、客人に対して供されるという典型的な「喫茶」の形式によって、供された客人の側が「喫茶」について好印象を得るという事実も有力な理由であろう。つまり、上で述べた「寝食を共にする」ということの典型的な形式の一つなのである。一つの急須の中に抽出した茶を、各人の器に注ぎ、それを一緒に喫することは、まさに「コミュニケーション」の成立に他ならないからである。

5. 〈閉じる〉と〈開く〉

ところで、地球上の異なる社会に属する人々、広く言えば異なる文明に生きる人々が互いに交流して理解を深め、さらに協働する必要性があるとしても、それはあくまでも双方の納得の上に実施されねばならない。自分の側の一方的な都合で相手に交流を迫ることは、交流の本義から外れることであるのは、言うまでもないであろう。

(1) 居場所としての〈閉じた世界〉

上述のように、地球上に存在するとされるいくつかの文明圏は、それが文明圏であるかぎり、まとまりをもっているという意味でゆるやかに〈閉じた世界〉を形成しているはずである——もちろん既述のように、その周縁部では他の文明圏との相互交流と相互浸透が生じているのではあるが。

このことは文明圏に妥当するのみならず国家に対しても妥当する。とりわけ「帝国」から離脱する形で「民族国家」Nationstateとして形成された近代の国家は、〈閉じた世界〉であることを強く意識して国家体制を構築した。自国の文化・言語体系・教育体制を整備して国民を国民たらしめるために必要な政策である。

これは、それぞれの国の民衆からも支持されてきた。なぜなら、国民たる個々の人間が、人として生きるためには自分たちの〈居場所〉を必要とするからである。人間が人間になるためには、動物たちのように単に生理的に生存していれば十分であるという訳ではない。落ち着いて教育を受け文化を習得するためにも人間は自分の〈居場所〉を必要とし、さらに社会のなかで自立した人間としてその生をまっとうするためにも自分の〈居場所〉を確保する必要がある。象徴的に表現すれば、自分と全体とが相互に焦点を結ぶために、われわれはまずは〈閉じた世界〉を必要とするのである⁽²⁹⁾。

今から二千数百年前に老子が以下のように記したのは、このことを説いたのに違いない。「小国寡民、什伯の器有りて用いらざらしめ、民をして死を重んじて遠くうつらざらしむ。舟輿有りといえども、これに乗る所なく、甲兵有りといえども、これを陳ぬる所なし。人をして復た繩を結びてこれを用い、其の食をうましとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しましむ。隣国、相い望み、鶏犬の声、相い聞こえて、民、老死に至るまで、相い往来せず」⁽³⁰⁾。

(2) 〈閉じた世界〉を〈開く〉

自らの居場所を確保することで、国家や文明圏は一定の安定した状態へと到達する。それが国家や文明圏が繁栄するということである。

その次の段階に現われることは、自己の国家や文明圏を一つのまとまりをもっていう意味で〈閉じた世界〉として意識しながら、他のそれらと比較したり交流することである。これが〈開く〉段階である。そして〈開く〉ことによって、自らの世界の長所と短所に気づくことが可能となると共に、認識

(29) カントは言っている：「国家としてまとまっている民族は、個々の人間と同じように判断されてよい」(Kant, Immanuel: *Zum ewigen Frieden* (Stuttgart 1954) S. 30 (宇都宮芳明訳『永遠平和のために』〔岩波文庫〕38頁)。

(30) 老子『道徳経』第80章(読み下しは福永光司訳『老子』下〔朝日新聞社刊〕198頁に従い、仮名遣いを変えた)。

された短所を改善する方策を他の国家や文明圏の中に見出すことも可能となる。

この〈開く〉に際しては、知識や情報あるいは物資を他の国家や文明圏から摂取するだけでなく、必要に応じて〈他者〉をも招聘することがある。明治維新直後のさまざまな「お雇い外国人（教師）」がその典型的な例であるが、有利な条件で労働に従事してくれる外国人労働者を受け容れることもある。

このようなプロセスを経て、一つの国家や文明圏は、結果的に多様性 Diversity に富んだ社会を形成できることとなる。しかし、多様性に富むことは、社会が流動的になり不安定になることでもあるから、過剰流動性を防止する必要がある。そこで、こうして獲得した多様性を包摂して安定した状態を成立させるためには、再び（以前の場合とまったく同じ状態ではないが）〈閉じる〉必要が生れてくる。

(3) 哲学者カントの鎖国に対する肯定的評価

われわれは文明開化の明治時代以来、江戸幕府が実施した鎖国政策を否定的に評価するべきであると教えられるのが通例ではなかっただろうか。そればかりではない。第二次世界大戦における敗戦への反省から執筆された著書『鎖国』において、和辻哲郎も鎖国政策を厳しく批判し、それによって日本が250年間
にわたって、世界における近世の動きから遮断されていたと述べている⁽³¹⁾。

しかし、上の(2)で述べたような視点に立てば、〈閉じる〉ことは必ずしも悪

(31) 和辻はこの書物を以下のように結んでいる。「ただこの一つの欠点〔為政者の精神的怯懦〕のゆえに、ペーコンやデカルト以後の二百五十年の間、あるいはイギリスのピューリタンが新大陸へ渡って小さい植民地を経営し始めてからあの広い大陸を西へ西へと開拓して行つてついに太平洋に到達するまでの間、日本人は近世の動きから遮断されていたのである。このことの影響は国民の性格や文化のすみずみにまで及んでいる。それはよい面もあり、悪い面もあつて単純に片付けることはできないのであるが、しかし悪い面は開国後の八十年をもつてしては容易に超克することはできなかったし、よい面といえども長期の孤立にもとづく著しい特殊性のゆえに、新しい時代における創造的な活力を失い去つたかのように見える。現在のわれわれはその決算表をつきつけられているのである」（和辻哲郎『鎖国』下〔岩波文庫版〕307頁）。

いこととは言えないばかりか、政治情勢によっては必要な措置であることも分かる。実際、18世紀ドイツの哲学者カント（Immanuel Kant 1724-1804）は、既に注29で紹介した晩年の著作『永遠平和のために』（1795年）において、中国と日本の鎖国政策を肯定的に評価して次のように記している。「それゆえ〔ヨーロッパ大陸の文明化された（gesitteten^{32）}）諸国家、とくに商業活動の盛んな諸国家の非友好的な態度と不正をみると〕中国と日本が、これらの来訪者を試した後で、次の措置をとったのは賢明であった。すなわち前者は、来航は許したが入国は許さず、また後者は来航すらもヨーロッパ民族のうちの一族にすぎないオランダ人だけに許可し、しかもその際にかれらを囚人のように扱い、自国民との交際から閉め出したのである」^{33）}。

このカントの評価の背後には、当時、ヨーロッパ大陸の西半分ではたえまなく大小の戦乱がつづき、とりわけ彼の祖国であるドイツは、300以上の領邦に分かれたまま、周囲のデンマーク、イギリス、フランス等の軍事的侵攻も含む干渉にたえずさらされて、なかなか民族国家という近代国家の形を整えることができていなかった事情が存在しているだろう。

つまり、国家の歴史は、そして文明圏の歴史もそれが存続してきた限りは、〈閉じる〉と〈開く〉の相互作用かつ交互作用で成り立ってきたと言えよう——もちろん、国家の場合と文明圏の場合では、その〈閉じる〉と〈開く〉の意思決定の機関の有無、および〈閉じる〉と〈開く〉の程度には相違が存在するのであるが^{34）}。

32) この語は、フランス語の *civiliser* の過去分詞の意味内容と同義である

33) Kant: *Ibid.* S. 37f. (『永遠平和のために』49頁)。この引用文中の〔 〕で示した部分には、小論1. (1)の末尾近くで論及したような、当時のヨーロッパ諸国のアジア・アフリカ地域に対する「文明国」とは思えない野蛮な振舞いについての、カントの批判的姿勢を読みとることができる。

34) 論者は、この〈閉じる〉と〈開く〉について、若干異なる視点から一文を草したことがある。八巻和彦「西欧における〈開かれた世界と開かれた書物〉」(石川文康編著『多元的世界観の共存とその条件』〔国際高等研究所報告書、2010年2月〕123-146頁)。

(4) グローバリゼーション主張者の二重の矛盾

20世紀末から21世紀初頭の現代において、徹底的に〈開く〉ことを提唱する流れを「グローバリゼーションの提唱」ととらえることができよう。そして、周知のようにこの主張の主たる源はアメリカ合衆国である。

ところが——この現在のアメリカ合衆国からは想像しがたいことではあるが——合衆国は長いこと自らを〈閉じた〉国としてきたのであった。第5代大統領モンロー（James Monroe）による1823年のいわゆる「モンロー・ドクトリン」以来、19世紀の終わりまでは明確に「孤立主義」を外交政策としてとってきた。そしてその傾向は、第一次世界大戦への参戦をめぐる論争を経て、第二次世界大戦にまで続いていたのである。さらにその間の移民政策においても、〈閉じる〉と〈開く〉を繰り返してきたのである。

これは、「モンロー・ドクトリン」が発表されるわずか五十年前に独立宣言を発したばかり若い国であるアメリカが、自らの建国の理念に基づいて懸命に国づくりをしようとしている段階で、ヨーロッパ側からの干渉を排除するために取られた政策決定である。その意味で理解可能なものと言えよう。実際、米国はこうすることで繁栄への道を整えることができたのであった。

ところが、そのアメリカがグローバリゼーションの主導的提唱者として、今では他国に対してほとんど強制的〈開き〉を要求しているのである。これは歴史的にみると矛盾をはらんだ自己中心的な外交的態度だとみなせるであろう⁶⁵⁾。

グローバリゼーション主張者における矛盾はこれだけにとどまらない。他者に対してはほとんど強制的に〈開く〉ことを要求しながら、自らのその主張を客観的吟味の場に提示することを許すことはほとんどなく、その意味では自ら

⁶⁵⁾ 「孤立主義」の時代のアメリカの外交政策にすでに矛盾を見出だすことも可能である。それは1853年のペリー来航である。アメリカ海軍提督ペリーは大統領親書をもって日本に来航し、開港を要求したのであった。

の主張を〈閉じた〉ものとしているのである。

現今のアメリカに見られる、自分が主張する原則に対する批判を認めないというこの〈閉じた〉姿勢は、実はアメリカの伝統であったという指摘もある。アメリカ政治外交史の専門家である西崎文子はそれを、『『自由の領域』の拡大が神の摂理であるという信念と、アメリカが選ばれた国家としてこの摂理を実現していくのだという二つの柱からなる『明白な運命』Manifest Destiny』に見出せると指摘している³⁶⁾。

6. 〈大きな物語〉

(1) ハンチントンの「大きな物語」

上の論文で西崎は、アメリカにとって戦後の冷戦とは「明白な運命」の追及の過程であったのであり、冷戦の終焉が「正義の勝利」と同一視され、その結果、「冷戦の終焉が『明白な運命』の成就であると捉えたことは、歴史の担い手としてのアメリカのアイデンティティを大きく揺るがすことになってしまった」と指摘している³⁷⁾。

われわれはこの西崎の指摘を、ハンチントンが冷戦の終焉をまって〈文明の衝突〉を説き始めたという事実と改めて結び合わせてみたい。なぜなら彼は、「ピルグリム・ファーザーズ」と呼ばれる人々の中に自らと同じ名前の直系の先祖をもつ、いわば「アメリカ」を体現するような家系の出身であり、アメリカの『国家戦略』を生涯のキャリアとしてきた人物である³⁸⁾からである。

今われわれは、「自由の領域」の拡大が神の摂理であり、それを、アメリカが選ばれた国家として実現していくのだとする、アメリカの「明白な運命」と

36) 西崎文子「『明白な運命』の終焉—さまよえるアメリカ外交」（雑誌『世界』〔岩波書店〕1998年4月号、186頁）。

37) 西崎文子、前掲論文196頁。

38) 中西輝政の記述（ハンチントン『文明の衝突と21世紀の日本』〔集英社新書〕所収の「解題」194頁以下）。

いう信念の内容は問わない。しかし、これほどの普遍性が負荷された課題が現実的に成就されるということが、そもそもありうるだろうか。しかし、上掲の西崎論文によれば、冷戦の終焉によってそれが成就されたと米国内では捉えられたのである。さらに西崎は続けて、「リベラル・デモクラシーやマーケット・デモクラシーを新たなアメリカの普遍的理念として掲げ、『明白な運命』の歴史認識を存続させる試みも、国際社会が多様化する中で、説得力をもつに至っていない」⁽³⁹⁾と指摘している。この把握に付言してわれわれは、ハンチントンも批判的な視線をもって認識しているとおりにアメリカ国内が多様化する中で⁽⁴⁰⁾、これは国内的にも説得力をもつに至っていない、とも言えるであろう。

このような状況のもとでハンチントンの〈文明の衝突〉という思考は生み出された。アメリカの「運命」を担うことを付託されたと自認していたであろうハンチントンは、「明白な運命」の成就によって、勝利の美酒に酔う暇もなく、かえって不安に駆られたのではないだろうか。アメリカの“新たな明白な運命”を設定しないかぎり、The United States of America はアイデンティティの危機に瀕するに違いないという不安である。そこでハンチントンは〈文明〉に注目したのである。なぜならば彼にとって文明とは、「人を文化的に分類する最上位の範疇であり、人類を他の種から区別する特徴を除けば、人のもつ文化的アイデンティティの最も広いレベルを構成している。…文明は『われわれ』と呼べる最大の分類であり、そのなかでは文化的にくつろいでいられる点が、その文明の外にいる「彼ら」すべてと異なるところである」⁽⁴¹⁾とされるものだからである。

リオタールのひそみに倣って表現すれば、「明白な運命」というアメリカにとっての〈大きな物語〉 grand récit⁽⁴²⁾の消失の後に、アメリカ国民が、「主体

(39) 西崎文子、前掲論文196頁。

(40) Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, p. 305f. (ハンチントン『文明の衝突』468頁以下)。

(41) Ibid., p. 43 (ハンチントン上掲書, 55頁以下)。

の解放、富の発展」という〈大きな物語〉のもつべき任務⁽⁴³⁾に貢献しそうな多文化主義 multiculturalism（とハンチントンには見えた）という〈小さな物語〉 petit récit⁽⁴⁴⁾に安住してしまうことがないように、再度アメリカ国民を動員して結集させるに足る新たな〈大きな物語〉が探し求められたのであろう。それがハンチントンによって〈文明の衝突〉として設定されたのであろう。上でみた彼の〈文明〉の定義に依拠するかぎり、この〈文明の衝突〉という〈大きな物語〉は、アメリカ国内にとどまらず国境を越えて同じ「西欧文明」に属する国々とそれらの国民に広範に訴える力を持ちうるからである：われわれの新たな課題は、〈文明の衝突〉に勝利して、西欧文明を護ることであると⁽⁴⁵⁾。

しかし皮肉なことに、このようなハンチントンの訴えそのものが、現状にあるアメリカを分裂させるし、世界をも分裂させるのである。上の注40で指示した箇所ではハンチントンも、彼なりの危機感と共に以下のように記している。「アメリカの内部からの挑戦はさらに直接的で危険である。…多文化主義という名目で、彼ら〔少数ながら影響力のある知識人や政治評論家〕は、アメリカの西欧文明との一体化を批判して、アメリカ人に共通の文化のあることを否定し、人種や民族をはじめとする国家より下位の文化的アイデンティティや集団の形成を奨励した」。

(2) 真に求めるべき 〈大きな物語〉

自己の属する社会に共に生きている、見たところ文化的に〈異なるもの〉と

(42) Lyotard, Jean-François: *La Condition Postmoderne* (Paris 1979), p. 7; p. 63; p. 98 (小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』〔水声社刊〕8頁：98頁：149頁) なお蛇足的に付言しておく、リオタールの〈大きな物語〉は冷戦終焉以前に提出された概念である。

(43) *Ibid.*, p. 7 (『ポスト・モダンの条件』8頁)。

(44) 例えば *Ibid.*, p. 98 (『ポスト・モダンの条件』149頁)。

(45) 現にハンチントンは次のように説いている。「〔アメリカ的〕政治的信条と西欧文明を拒否することは、われわれが知っていたアメリカ合衆国の終焉を意味する。それはまた、効率のよいことに西欧文明の終焉をも意味する」(Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, p. 305f. (『文明の衝突』470頁)。

しての人々は、ほとんどの場合、彼らが勝手にこの社会に押し寄せてきたのではない。われわれの社会の必要性によってか、あるいはその政策の結果としてか、いずれにせよ、自分たちが招き寄せた人々である⁽⁴⁶⁾。この事実を率直に自認しなければならない。そして、彼ら〈異なる人々〉も、自分たちと同じく一回限りの人生を懸命に生きているという事実を認識する必要がある。

アメリカ合衆国の短期間のうちの建国の成功とその繁栄の源は、WASP (White Anglo-Saxon Protestant) がそのほとんどを占める建国の父とその子孫たちの貢献だけではなかった。それ以外の属性をもった様々な地域の出身者たちの貢献も不可欠であった。その中には、不当にもアフリカ大陸から連行されてきた奴隷たちも、当然のこととして含まれねばならない。

そしてこの政策と現実とは、形を変えながらも今なおアメリカに存在していることも認識されねばならない。それぞれの分野でアメリカが必要とする優秀な人材が、有利な条件を提示されて世界中からスカウトされているのである⁽⁴⁷⁾。しかし、それぞれの分野は自らの分野にとって必要とみなす有能な人材を招くのであるから、それら外国の人材の人種的出自や文化的・文明的な属性が一元的基準によって判定されることはない。こうして多彩な人材が集まって、現在のアメリカの繁栄が維持されているのであるが、それは同時に多文化的アメリカ社会を形成することになっているのである。

このようなアメリカ合衆国自身に起因する現代アメリカ内部における諸文明の現存に、上で言及したような立場のハンチントンが（だからこそであるか）苛立ちを示しているのである。あまりにも自己中心的な姿勢ではないだろう

(46) 上で引用した老子の一節に「民をして死を重んじて遠くうつらざらしむ」とあったとおり、歴史的にみれば、民衆が他の地域・国家・文明圏に生活の本拠を移すことは自らの命を危険にさらすことであり、彼らがすすんで希望するようなことではなかった。この事情を冷静に認識する必要がある。

(47) この点には、すでに出来上がった人材としてスカウトするので、育成のための経費がかかっていない分、招聘のためには有利な条件を提示することが可能となっているという側面もある。

か⁽⁴⁸⁾。

ところで、かつて世界に冠たる大英帝国として地球上にたくさんの植民地をもっていたイギリスも、第二次世界大戦が終了して以来、多民族国家としての問題を抱えている。この点について、1960年代末からバーミンガム市において宗教寛容の実践に取り組んでいたヒック（John Hick 1922-）が述べていることを、以下に少々長く引用してみよう。「多くの人々は、アジア人や西インド諸島の人々のことを、勝手にここ（英国）に住みつ়くことにしたよそ者であるかのように思っている。しかしこのように考えることは、インドや西インド諸島の歴史がそこにおいてグレート・ブリテン島の歴史と密接に織り合わされてきたところの、大英帝国の長い歴史を完全に無視することになる。英国に住むわれわれは、植民地時代以後の現時点において、わずか一代前まで非常に強力な現実であったこの世界的な結びつきのことを忘れかけているのかもしれない。しかしその影響は、良きにつけ悪きにつけ、今なお旧植民地の生活の中に続いているのである」⁽⁴⁹⁾。

このように過去の経緯に注意を喚起した上で、ヒックはさらに続ける。「もしわれわれが過去ではなく、将来に関心をもつのであるならば、この国の人々のなかには200万人に近い黒人・褐色人の男女子どもがいるという事実、この数は今世紀〔20世紀〕末までに、もっぱら子どもの自然出生により300万人を越えるであろうという事実、さらにその多数がわれわれと同じ法律上の権利・義務をもつ英国市民であるという事実、さらにまた、その約半数がこの国で生まれ、この国以外に故郷を持たない人々であるという事実から始めなければならない。彼らは、100年以上も前にアイルランドから渡ってきた先祖を持つ者や、あるいは900年前のノルマン征服のときに渡ってきた先祖を持つ者と同様

(48) こういう自己中心性、ご都合主義は、一人ハンチントンにのみ見出されるものではない。他の多くの欧米人の思考の中に存在するし、われわれ日本人の思考にも存在するものである。

(49) Hick, John: *God Has Many Names* (London/ Basingstoke 1980) p. 14 (間瀬啓允訳『神は多くの名前をもつ』(岩波書店刊) 31頁)。

に、現代英国の実質的な構成部分をなしているのである。それゆえ、本国への「強制送還」という極端な人種政策はまったく非現実的である。その政策は、本当は本国への強制送還ではなくて、有色という理由にもとづく有色市民の強制排除である。…悲しむべきことにサッチャー夫人は、1978年1月のテレビ会見で、この種の偏見を新たに尊重されるべき社会的位置にまで祭り上げてしまった。夫人はその中で、英国が「異文化をもつ人々によってむしろ泥沼にはめられることになるかもしれない」という恐れをはっきり述べたのである⁽⁵⁰⁾。

このヒックの言明のなかにわれわれは、イギリスの社会とその構成員に対して向けられた彼の〈開き〉の呼びかけを読み取ることができる。

われわれが真にもとめるべき〈大きな物語〉とは、つとに18世紀末にカントが『永久平和のために』で展開した思想世界、またこのカントの理想に刺激されつつ第二次世界大戦後の核兵器による威嚇において展開されていた冷戦に対して自らの哲学をもって果敢に立ち向かったヤスパースの『原子爆弾と人間の将来』や『歴史の起源と目標』で示されているような思考であろう⁽⁵¹⁾。本稿では、これらの具体的な検討に入ることを断念せざるをえないが、根本に据えておかれるべきことは〈他者・異なるもの〉に対する単なる寛容のみならず根源的な信頼を保持することからもたらされる〈開かれ〉と、それに基づく平和な世界のあくなき追求であろう。

(50) Hick, Ibid. p. 17ff. (『神は多くの名前をもつ』37-39頁)。

(51) 自身が核開発に関わったことへの深い反省から、第二次大戦後に物理学者でありつつ哲学者としても独自の思考をもって〈平和〉を呼びかけ続けたドイツの Carl Friedrich von Weizsäcker (1912-2007) の思想も同じ視点から注目されてよいだろう。